

GeNuine で活動するユース・徳田悠希さんに訊く

以下は、2024年10月5日、徳田悠希さんにオンラインでインタビューを行った内容を編集部がまとめたものである（文責：事務局）。聞き手は、日本反核法律家協会の田中恭子事務局が務めた。（文中の脚注は編集部による。）

徳田悠希（とくだ・ゆうき）さん

上智大学卒業後、一橋大学院に進学し現在修士1年。大学在学中から核兵器廃絶の運動にかかわりはじめ、オンライン被爆者証言会や国会議員に核兵器禁止条約に関するインタビュー活動などに取り組む。核兵器禁止条約第1回締約国会合に参加して、ジェンダー視点から核兵器廃絶をうったえる他国のユースの姿に触発され、帰国後、2023年4月にGeNuine¹を立ち上げる。「とりこぼされた声」を可視化し多様なジェンダー視点を提示して核兵器や構造的暴力のない世界をめざすGeNuineの代表。

プロフィール

——本日は、よろしくお願ひいたします。さっそくですが、徳田さんはどのようなきっかけで、核兵器の問題、ジェンダーの問題に関わろうと思うようになったのでしょうか。

中学3年生の修学旅行で広島を訪れました。そのときの宿泊先に、被爆者の方がきてくださって、生徒が20人から30人くらいのグループに分かれて、それぞれ話をうかがったんです。東京で生まれ育って、広島長崎のことなどほとんど意識になかった私にとっては初めての体験でした。被爆者の証言を聴き交流する中で、被爆された当時の年齢が、そのときの私と同年だった、



徳田悠希さん

と知って、とてもリアルに受けとめました。その被爆者の方がお話の最後に、「自分が被爆した当時よりも今は何千倍、何万倍も核兵器は増えてしまっている。この先、自分が再び被爆を体験するよりも、未来の長いあなたたち自身が被爆者になる可能性が高いのだから、この危険が続いていることを知ってほしい」と言われたとき、これは昔の話ではないのだ、と強く思いました。それが最初のきっかけですね。



インタビューー田中事務局

1 <https://genuine2023.wixsite.com/genuine> 参照。

けれど、修学旅行から帰った後、何をしたらいいのか分からないまま、もどかしい気持ちで高校時代を過ごしたのですが、その頃はトランプ大統領の下で国際的緊張が高まっていることとか、また高校2年のときに核兵器禁止条約が採択されたこととか、ずっと気になっていて、そのモチベーションは消えずに残っていました。

とはいえ大学進学の際には、核軍縮に向き合うために何を勉強していいかわからなかったので、高校時代に国際協力のユースチームにいたこともあって、グローバルな問題全般にかかわることを学んでいましたが、大学在学中に勉強したり皆さんと活動したりする中で、テーマを核軍縮・不拡散に絞って大学院進学を決めました。

ジェンダー問題に関しては、中学1、2年生の頃から身近に感じていました。セクシャルマイノリティやデートDVなど、いわゆるジェンダー問題に分類されるような生きづらさ、「当たり前」の枠から外れたときにぶつかる大変さといったことについて当事者意識がありました。当時は、ジェンダーとかLGBTQといった単語も一般的ではなかったのですが、大学に入ってから周囲にジェンダー問題に関心のある人、当事者である人がいたので、わりと自然に活動に入っていました。大学のサークルで、学内のジェンダー平等をめざして、トイレに無償の生理用品を置くとか、ジェンダー関連科目を増やすよう交渉するとかのとりくみを通して、大学という自分たちの生活フィールドをいかに良くしていくか、という活動をしていました。

——核兵器の問題とジェンダーの問題、この二つを結びつけたとりくみを徳田さんが始められるのには、何か特別なきっかけや経緯があったのでしょうか。

二つの問題を一緒に考えなければいけない、と自覚する大きなきっかけは、2022年の核兵器禁止条約第1回締約国会議への参加でした。それ以前から核の存在が権力関係や構造的な暴力に結びついて、ということは漠然と感じていましたが、第1回締約国会議で、ジェンダーの視点から核廃絶を訴えている多くの人たちと出会いました。核兵器を持つこと自体が非常に家父長的な考え方と親和性が高く、自らの力の誇示を通して弱者への抑圧を強める傾向は、ジェンダー問題と構造的に似通っています。その構造的暴力が背景にある政策の結果として、ジェンダー不平等だけでなく植民地支配を受けてきた人たちなど周縁の人に被害が偏っている状況に目が向くようになりました。ジェンダー問題と、放射線の女性への不均衡な影響といったことも含めた核・軍事分野の問題とが、非常に関連しているからこそ、これを変えていかなければいけないと訴え、それを軸に活動している人が思った以上に多かったことに驚きました。

世界でそういうことが語られているのに比して、日本ではまだまだそういう切り口で語られることは少ない、ならば日本でジェンダー視点から核問題を語ることが、日本の文脈にうまくはまっていけば、従来からジェンダー問題を専門にとりくんできた人たちも巻き込んで、可能性が広がるのではないかと、そんなふうに思いました。初めての国際会議で、現場では何をしたらいいのか分からないまま参加したのですが、行ったからには何か日本にプラスになるものを持ち帰りたと思っていましたから、日本に戻ったらジェンダー視点から核の問題にとりくもう、と心に決めて、そこからどうやって進めるかを模索し始めました。

——それが、GeNuine を立ち上げるきっかけになったのです。今、GeNuine ではどのようなことに力を入れておられますか。

今大きな目標にしていることのひとつが、2025年3月の核兵器禁止条約第3回締約国会議にあわせて、日本で被爆者として生きる中での差別、そしてジェンダー差別がどう重なり合ってきたかということ、さまざまな人へのインタビューや聞き取りなどのフィールドワークで作業文書にまとめることです。それがひとつ中心の内容になっています。同時に、2ヵ月に1回くらいの割合でイベントを開催して、その調査状況を報告したり、以前制作したアニメーション²の上映会や読書会を行ったりしています。

企画も含めて一緒にとりくんでいるコアメンバーは5人くらいです。私と同じような大学院生の方も、仕事に就いている方もいますが、実は、ずっと核兵器の問題に関心があった、というよりはむしろジェン



ダー問題に関わってきた人の方が多くて、その中でそれぞれが意見を出し合って、新しい発見がありますね。イベント内容も非常にバラエティに富んでいて、楽しみながらとりくんでいます。

——徳田さんが日本キャンペーンのサイトに発表されたレポート「NPT 第2回準備委員会におけるジェンダーに関する議論の動向と課題」³を拝読しました。この中で核軍縮の分野における「ジェンダー主流化」という考え方を紹介しておられます。「ジェンダー主流化」については、まだ私たちにもなじみの薄い考え方だと思いますので、改めてご説明いただけますか。

もともと軍事や安全保障分野、とくに核兵器の問題となると、議論の中心にいるのは男性ばかりで、女性が中心的な役割を担うことはほとんどなかった、という状況がありました。ジェンダー主流化という考え方自体は、ことに人権や開発の分野などで女性の視点・女性の参加が必要だ、というところから生まれてきたもので、そこからだんだんその対象となる範囲が広がり、さまざまな権利条約などを策定していく過程に女性の声を重視していく傾向が広がっていった、という背景があります。

最初はただ、女性が加われば良いという発想だったのが、それだけでは解決しないことがある、男女の不均衡な関係という問題に目を向けよう、という意識になり、そこで「ジェンダー」という考え方がでてきます。現実の社会において、女性は男性と異なった認識のされ方や制度に直面していて、それが原因となって男性と女性、さまざまな局面で異なった結果を迎え異なった

2 <https://www.youtube.com/watch?v=0EQ7jSNKDPU> から視聴可能。(右 QR コード)

3 <https://nuclearabolitionjpn.com/archives/7166> で閲覧可能。



影響を受けています。そこで、この「ジェンダー主流化」とは、いろいろな政策をつくり精査する段階から、もしくは制度を再構築してその検討プロセスの中に、ジェンダーの視点を加え、最終的にジェンダー平等を目指そう、という考え方です。

冷戦終了後の1995年以降、その考え方が広まっていますが、核兵器の分野ではそのタイミングに乗り遅れ、核兵器に関わる会議でも女性の数は5%とか10%に届かないという時期が続いていました。それが、2013年頃から、いわゆる核兵器の人道的影響に関する国際会議を契機に、放射線は女性や少女（年齢が低いほど放射線に対する感受性が高い）に不均衡な影響を与える、核被害もジェンダーによって差が生まれる、という問題提起に注目が集まるようになります。そこから、核兵器禁止条約を推進する国を中心に、「ジェンダー主流化」の動きが進んでいきます。

——しかし、先に挙げたレポートの中で、徳田さんはジェンダーの視点を入れることが分断の要素につながりかねないことも指摘しておられます。これはどういうことでしょうか。

ジェンダー視点をとり入れることは、核兵器の非人道性についての理解が進むことにつながるとは思いますし、その考えに変わりありません。性別により異なった扱いを受ける、より弱い立場にある人の声に耳を傾けることは、非人道性の多面的な要素を理解し、議論を豊かにすることにつながります。それは、核兵器禁止条約の普遍化にとっても不可欠な作業だと思います。

しかし、一つにはジェンダーを男女のみととらえる二元論の立場をとるのか、LGBTQまで射程に入れるかどうか、という論点。もう一つには、ジェンダーを社会

的な性差と解釈するか生物学的な性差として理解するのか、という論点。こういったところで、各国の認識にはかなり差があります。実際、核兵器禁止条約締約国の中でも、ジェンダーの捉え方があまりにも自国の認識と乖離している場合には、もう賛成できないと表明している国も存在し、今後難しい問題と向き合うことになると思います。コンセンサスが必要な場で、各国の文脈をあまりにも無視し続ければ交渉が進まなくなるということもありますから、やはりバランスをとることも必要だと思います。

けれども、LGBTQを排除したり、ジェンダーを生物学的な差とのみとらえたりするのは、非人道性の議論を狭めてしまうのではないのでしょうか。例えば、被団協・被爆者の方たちが訴えてきたのは、身体的な被害はもちろんだけれど、心や暮らしにかかわる非人道的な影響であって、生物学的な差だけでは、その観点は抜け落ちてしまいます。それを市民社会の側から、締約国にどう伝えていくかが今後の課題でしょうし、先ほど述べたGeNuineが今とりくんでいる被爆者の方へのインタビューの調査結果も、そのために役立てることができるのではないかと思います。

——宗教観から、また地域の伝統を守るという立場からジェンダーに否定的な見方をする人たちには、どういった働きかけが必要になるのでしょうか。

今一番難しい壁だなと思っているところです。ジェンダーについての考え方は、宗教によっても異なりますし、グローバルサウスと呼ばれる国々には「ジェンダーなんて西洋主義、西洋の考え方だ」として、それを押し付けられることに抵抗感を示す国もあります。しかし、それらの国々で、現

に女性への暴力が正当化されたり抑圧されたりしている場合、その現地にいる人たち自身がどれだけ主体性を持つか、自らの選択でどちらを選ぶのか、ということが大切になると思います。正当化された暴力や抑圧の下にいる人たちが立ち上がったときに、それを私たちがどうサポートできるのかが問われると思っています。

たとえば、西洋の国がイスラム圏でジェンダーの話をする、イスラム圏の男性と議論することが多くて、そのやり方でよいのかどうか。実際に抑圧されている人たちとうまくつながる方法はないのか。現地の力を大事にすること、その現場に入って、いろいろなところから学んだり、切り口を考えたりしながら、さまざまな角度からつながりをつくっていくこと。それは道のりが遠くて時間はかかるでしょうが、息長く取り組めたらいいなと思います。

——今年9月に開催された国連未来サミットに参加されたとうかがっています。いかがでしたか。

国際会議では、これまで核兵器禁止条約締約国会議しか参加したことがなかったので、ニューヨーク国連本部で開催された未来サミットでは圧倒された、というのが正直なところ。核兵器の問題だけではなく、気候変動、開発、ジェンダー、さまざまな課題に取り組んでいる人が集まった会議でした。アフリカからやってきたユースが多かったのに比べて、日本含めアジアからの参加者が少なかったところは、将来課題についての緊迫感に差があるのかな、と。けれど、これだけ多様な課題がある中で、今回、採択された「未来のための協定」に「核兵器のない世界に向けて前進する」という文言が盛り込まれたのにはとても安心しました。世界中で戦争が継続している中で、

この部分は合意されない可能性が高かっただけに、核戦争のリスク回避などが確認されたことは、NPTがここ10年程合意ができていないことからしても、非常に良かったと思います。

未来サミット会期の前2日間は、「アクションデイズ」ということで、国連施設すべてをユースが使ってお祭りのようにいろいろなサイドイベントが行われました。そこで、核兵器とジェンダー、気候変動とジェンダーといった具合に、さまざまな人たちと情報交換できて、これから市民社会がどうかかわっていくのか、どう世界とつながっていくのか、多くのヒントをもらえた時間になりました。

私が活動を始めた頃は、他の課題の人たちとのつながりが全くない、という印象で、自分のとりくんでいる課題以外のことは互いによく分からない、という感じでしたが、少しずつ流れが変わりつつあるように思います。今回の未来サミットでも、国際協力にかかわって開発問題に取り組んでいる人が、「核廃絶のことも話しますね」と言って彼らのプレゼンにとりいれてくれました。こういうつながりは大事にしなければいけないし、同時に核や軍縮問題に取り組んでいる私たちが、他の問題についてどのくらい声を挙げてきたのかを振り返ってみる必要があると思います。このようなネッ



トワーキングを弱体化させないためにも。

——今後、核兵器をなくすために、何が一番大事なことだと思われますか。

残念ながら、私が核問題にかかわり始めた頃よりも、核廃絶というゴールとの距離が広がっているのではないかと、この間に急激な変化が起きているのではないかと感じています。私の周りの核・軍事の専門的研究者の間では、核兵器はなくすべきだが、核軍縮を交渉できる段階になるまでは辛抱強く待つしかない、という考え方が多数派です。

その中であって、私自身は、核抑止からの脱却と核廃絶、そして戦争やあらゆる差別のない社会をめざすという思いは揺らぎませんが、核戦争の危機が現実迫っている中で、今この段階で核兵器を使わせない、核のタブーを強化するために、核軍縮を主張しつつも“現状”核抑止は必要である、との意見の方ともゆるく手をつないで、それぞれがどこで、誰に対してメッセージを発信できるか、という視点も必要なのではないか、そのためのコミュニケーションが大切になってくるのではないかと、思います。核廃絶という目標からみれば、非常にもどかしいですが。けれども、核兵器のない世界に近づくためには、そのギャップを埋める作業も重要なのではないのでしょうか。緊張が高まっている中で、当面核使用を防ぐために最低限のラインで一致できるかどうか、結局、この先核兵器がなくなるまでの時間をも左右するのではないかと、そんなふうに思っています。

核兵器禁止条約はNPTを崩壊させるといった悪いレッテルを貼られがちですが、核兵器禁止条約第2回締約国会議の中で核リスクについての科学的な説明をしようという流れが生まれてきたことは、核による

安全保障を主張する人たちから門前払いをくもらないようにするという意味でも、今とても重要なことだろうと思います。核兵器禁止条約にかかわって取り組んでいるユースは、世界的に見ても非常に多いだろうと思います。核兵器禁止条約は市民社会にとっても開かれているし、それがスタンダードなのだと感じている市民・ユースが今後さらに増えていくでしょう。今は最低ラインの合意をする段階かもしれませんが、そこを超えたら大きく進む可能性を秘めていると思います。やはり諦めないことが、大事だと感じています。

——最後にもっとも訴えたいことをお話しください。

核兵器問題の分野では、他の分野に比べてもユースは非常に大事にされていると感じます。その中でもユースの主体性は重要で、世代によって考え方がどんどん変わってきているわけですから、いろいろな違いを超えてどのように一緒にやっていくか、が問われていると思います。最後にユースの出番をつくっておけばいい、というかわり方ではなく、最初の段階から一緒に、同じように責任を共有しながら取り組んでいくための工夫が必要になるでしょう。国内各地のさまざまなとりくみの中でも、若い世代が違和感なくとけこめるような仕組みを、今の内からちゃんとつくっておけば、私たちよりさらに下の世代も続けていけるのではないのでしょうか。それぞれの世代が対等に、同時に各人の専門分野や経験を活かして、これからもいろいろなコラボができたらいなと思っています。

——本日は、長時間にわたり貴重なお話をいただき、有難うございました。